

肢体不自由児クラスのとりのくみ

子ども発達支援センター愛 児童指導員 上田 美菜

1. はじめに

子ども発達支援センター愛では、児童発達支援センター「子ども発達支援センター愛」、多機能型障害児通所支援事業所「子ども発達支援センター愛 親子通園部ゆう・学童通園部ゆう」、相談支援事業所「子ども発達相談センターぽこ・あ・ぽこ」、保育所等訪問支援事業の4つの事業を行っている。

子ども発達支援センター愛には、さまざまな障害のある子が通っているが、今回は平成25年4月から平成26年3月までの肢体不自由児クラス「たまごちゃん」のとりのくみ、主に一年間継続してとりのくんだ運動あそびについて報告したい。

2. 肢体不自由児クラス「たまごちゃん」について

(1) 子どもたちの様子 (平成26年3月時点)

① 年齢

	3歳	4歳	5歳	6歳	計
男児	1	2	2	1	6
女児		1	4	1	6
					12

② 診断名

ダウン症	脳性マヒ	広汎性発達障害	その他の障害による肢体不自由
4	3	1	4

(※脳性マヒに視覚障害、てんかん含む)

- ・経管栄養やてんかん発作、酸素吸入など、医療的ケアが必要な子が数名いる。

③ 運動発達の状況

独歩可能	ハイハイ・ バニーホッピング	ずりばい・ 寝返り移動	自力移動が難しい
5	3	2	2

(2) 職員体制

児童指導員1名、保育士2名、理学療法士1名、看護師1名

- ・体調面のケアや抱っこ仕方など、慣れないと不安なことも多いが、理学療法士や看護師がクラスに入っているため、個別にクッションやマットなどでイスに座る際の姿勢

の調整をしたり、自由あそびの時間の姿勢づくり（うつぶせ、立位など）をしたり、体温や酸素飽和度、皮膚のチェック（カサカサして脱水になっていないか、湿疹はないかなど）、てんかん発作の対応などを職員が連携しておこなうことができている。理学療法士や看護師にアドバイスをもらいながら、子どもたちが安全にすごせるように心がけた。

3. たまごちゃんクラスの目標

(1) 年間目標

- ・生活リズムを整えよう
- ・健康的なからだづくりをしよう

たまごちゃんクラスには、医療的ケアが必要な子や、生活リズムが整わず、睡眠不足や不規則な食事になる子が多い。そのため、園で日中しっかりとからだを動かして過ごし、給食をしっかり食べて夜しっかりと寝る、という生活リズムをつくっていくことが大切と考えた。また、自分で身体を動かす機会が少ない子が多いこともあり、一年間を通して運動あそびにとりくむことにし、毎週1～2回設定して行った。

(2) 月間目標

年間目標を軸に、さらに3学期に分けて目標をたてた。

1 学期	2 学期	3 学期
<ul style="list-style-type: none"> ・新しい環境に慣れる ・好きなあそびを見つける 	<ul style="list-style-type: none"> ・身体を動かす楽しさを知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちと遊ぶ楽しさを知る

4. たまごちゃんクラスの運動あそびのとりくみについて

1 学期	<p>マットでの寝返りやすべりだいなど、全員一緒に同じ活動にとりくんだ。まずは自分で身体を動かすことを意識できるように、転がる、歩く、ハイハイで進むなど、簡単な動きでゴールまで行く活動にとりくんだ。さらに、マットにぐるぐる巻きになって全身を包み、その中でボディ・イメージの獲得に繋がるようにした。4月には、マットの素材が苦手な子もあり、最初はマットに触ったり、座ったりすることから始めた。また、視覚的に示すとわかりやすい子が多く、必ず職員が見本を見せてから行った。子どもたちが身体を動かすことに慣れてきた5月頃から、少しずつ斜面を歩く、マットの山を越える、などの障害物を取り入れ、足を上げて歩くことや身体全体を使って動くことを意識できるようにした。</p>
------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

2学期	しかし、一人ひとりの動きの違いが大きく、同じ活動にとりくむことが難しいという面が出てきた。また、大人数だと待つ時間が長く集中が続かずに離席したり、みんなに見られると緊張して思うように動けないといったこともあったため、2学期は動きの違いで3つのグループに分け、少人数でとりくむことにした。
------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

※各グループの活動内容や目的、活動の様子は次の通りである。

Aグループ (4名)		
移動面	自力移動が難しい、寝返りやずりばいで移動可能	
活動内容	【マットあそび】 マット一枚分をずりばいや寝返りで移動する。ゴールにはそれぞれの好きなおもちゃなどを置いておく。	【バランスボールあそび】 バランスボールの上でうつぶせで寝たり、座ったりし、『バスごっこ』の音楽に合わせて揺れを楽しむ。
活動の目的	<ul style="list-style-type: none"> ・身体の使い方を知る。 ・自分でできる経験を増やし、達成感を味わうことを積み重ねることで、自分で寝返りやずりばいをし、動いたら欲しい物に手が届くという経験に結びつけていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・うつぶせや坐位の機会をつくる ・腕や手で自分のからだを支えて頭を持ち上げることができるようになる。
活動の様子	<div style="text-align: center;">  <p>【写真1】寝返りの練習</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>【写真2】</p> </div>	<div style="text-align: center;">  <p>【写真5】腕で身体を支える</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>【写真6】</p> </div>

	 <p>【写真3】目標のところまで！</p>  <p>【写真4】</p>	
--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--

Bグループ (3名)	
移動面	ハイハイや四つ這いの姿勢で移動が可能
活動内容	スロープを上り、滑り台を滑ってタンバリンを叩く
活動の目的	<ul style="list-style-type: none"> ・四つ這いの機会をつくって身体の使い方を知る。 ・四つ這いから滑るために足を前に出して座る練習をする。 ・足の筋力をつける。
活動の様子	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>【写真7】スロープをのぼる</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>【写真8】</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="text-align: center;">  <p>【写真9】足を前に出す練習</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>【写真10】</p> </div> </div>

Cグループ (5名)	
移動面	独歩が可能
活動内容	はしごを渡って滑り台を滑ってタンバリンを叩く
活動の目的	<ul style="list-style-type: none"> ・身体の使用方を知る。 ・はしごを渡ることで手足の協調運動を促し、上肢と下肢の筋力、手足の指の力をつける。 ・四つ這いから坐位へ姿勢を変える機会をつくる。 ・滑りながらタンバリンを叩くという動作で、タイミングを合わせたり、距離感をつかんだりする練習をする。
活動の様子	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>【写真 11】 はしごを渡る練習</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>【写真 12】</p> </div> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 10px;">  <p>【写真 13】 タイミングを合わせて♪</p> </div>
3 学期	<p>これまで継続してとりくんできたものを基礎に、さらに一人ひとりに合わせて発展させて設定し、とりくんだ。スケーターやトランポリンなど風や揺れを感じるものや、ボールシュートやブロック崩し、ボウリングなど、細かい動きのあるものも取り入れた。また、スケーターに友だちと一緒に乗る、ボウリングをチーム戦で行うなど、友だちとの関わりも持てるような活動も取り入れた。</p>

5. とりくみを通して 今後の課題

(1) 個別に合わせた活動と目標

運動あそびをした日は、理学療法士とクラスの職員とでその日の活動について振り返りを設け、子どもたちのとりくみの評価や、活動内容の見直しをした。グループごとにとりくみ始めてから、同じ運動あそびの中でも一人ひとりの動きに合わせて

て活動を設定することができた。また、「身体を動かすことに慣れる」「身体を動かす楽しさを知る」という大きな目標を軸に、「うつぶせで顔を上にあげる」「つたい歩きをする」といった個別の次の目標が明確になった。また、クラスのスタッフも、理学療法士に一人ひとりの運動面の詳しい様子、姿勢の取り方、今後の目標について聞きながら、一人ひとりと丁寧に関わることができ、実際の生活場面での支援にもつながった。また、大人数だと緊張して動けなかったり、自信が持てなかった子ども、少人数になることで緊張も和らぎ、自ら前に出てとりくもうとしたり、できることを自信を持ってとりくんだりできるようになった。

(2) 友だちへの意識の芽生え

秋を過ぎた頃から、運動あそびに慣れてくる中で、子どもたちにも変化が見られた。「○○ちゃんががんばれ！」と友だちを応援したり、マットのゴール側で「こっちだよ」「もうちょっとだよ」と呼んだり、呼ばれると嬉しそうに友だちを見ながら前に進んだり、ゴールした後にハイタッチをして喜んだりする姿が見られるようになった。また、はしごが怖くて渡れなかった子ども、友だちをモデルにして渡ってみたり、友だちのとりくんでいる様子を見て「やる！」と前に出たりと、友だちへの意識が芽生えてきた。今後は、友だちから呼びかけられたり、応援されることに楽しさを感じたり、自分なりの方法で友だちに発信する楽しさを感じたりできるように、環境を整えていきたいと思う。

(3) コミュニケーションの幅を広げる

順番のある活動では、独歩が可能な子や発語のある子がどうしても先に取り組むことが多いという面があり、楽しく身体を動かす中で、子どもたちの思いを表現したり、やりたい活動を選択して決めたりといった、コミュニケーション面での支援にも力を入れてとりくんでいかなければならないと思った。発語の難しい子の側にビッグマック（音声再生型の会話補助装置）【写真 14】を設置して、「やりたい人？」の問いかけに、ボタンを押すと「はい」と返事の声が出るようにした。また、自分で選択したり決めたりすることを大切にしているため、歌のペープサートや活動の写真を2つ提示し、バランスボールで揺れるときに歌いたい曲や、やりたい活動を選んでもらうといった機会を多くつくった。また、バランスボールで揺れた後に「おーしーまい」の声に悲しそうな表情をし、“もう一回やりたい”といった表情を見せる子どももいた。「揺れる」と「止まる」から、始まりと終わりを意識するようになり、「はじまり」を期待する力にもつながるのだと感じた。そういった意欲や気持ちをもっと引き出していくには、今後も楽しい遊びを通して、発語のない子ども、自由に思いを表現したりできるように、一人ひとりに合った表出の方法を見極めていく必要があると思った。

(4) 「動くこと」と「リラックスすること」

筋緊張が強い子どもが多く、午前中に身体をしっかりと動かした日は、ゆったりとし

た時間をつくってみるのはいかがでしょうか、という提案がクラス職員の話し合いで出た。そこで、午後にスヌーズレン【写真15】を取り入れ、緊張を緩めてリラックスする時間を設けた。スヌーズレンでは、遮光カーテンで部屋を真っ暗にし、オルゴールの曲をかけながらミラーボールなどで光を映し出し、心地よい環境をつくった。最初は楽しそうにはしゃいでいた子どもたちも、少しずつ身体の力が抜け、全身をビーズクッションや布団に包まれてリラックスする様子が見られた。

自ら好きなところに移動したり、身体の力を緩めてリラックスしたりすることが難しい子が多い中で、「動くこと」と「リラックスすること」を意図的に取り入れていく必要があると感じた。

【写真14】 ビックマック使用の様子	【写真15】 スヌーズレンの様子
 A photograph showing three children sitting in colorful, high-backed chairs (Big Mac chairs) in a room. Their faces are obscured by blue smiley face icons.	 A photograph of a dark room (Snooze room) with colorful lights (blue and green) and a large blue smiley face icon in the foreground.

6. おわりに

この一年間、一人ひとりの子どもたちの良さを伸ばしたいと考え、その子に合った支援の工夫をしてきた。その中でも、どんなに障害の重い子どもでも、主体となって動いたり表出したりする大切さを知った。特に運動あそびでは、日常生活では経験しにくい動きや身体の位置関係を楽しみながら、自分の身体に関する経験を豊かにすることができると感じた。

また、子どもたちは、さまざまな遊びを通して、心を開くことができる大人や友だちをつくり、してほしいことなどの要求を伝えたり、好きな遊びを選択したりする力を育てていくのだと感じた。そのためにも多職種が連携し、環境を整えたり、そのような場面や機会を多くつくったりして、子どもたちの自信や意欲につなげていく必要があると思った。

今後も生活の中で一人ひとりが力を発揮し、安心して心を開き、楽しい、自分の思いを受け止めてくれるという実感ができるよう、子どもたちの大好きな遊びを通して発達を支えていきたい。